峰 万里恵ファド・ライヴ

Noite de Santo António

20 de junho, 2009; no bar Olé

峰 万里恵（うた） 高場 将美（ギター）

1ª parte

1．ファド・モウラリーア “わたしは歌を追っかけてました”

Fado Mouraria "Corria atrás das cantigas"

詞 & 曲：アマーリア・ロドリーゲス Amália Rodrigues

アマーリアさんが歌手としてデビューしたころ（19 才？）つくった曲です。最初は作者不明の、聞き覚えた歌詞ということにしていたそうです。曲は昔からのメロディ・パターンをほんの少しだけ変えています。

わたしは人生に、うたいながら入ってきた。そして歌われたわたしの嘆きは、泣きながら行ってしまった。そのあとは人の思いを感じる心といっしょに。

ほかの女の子たちと通りで遊びながら、わたしは街の歌のひびきに乗って走っていた。止まるのは、ただうたうためだけ。

やがてようやく大人の女性になったころ、わたしは最初の愛を歌った。そしてまた、ひとりでうたった、わたしの最初の痛みを。

わたしは人生を過ごしてきた。うれしくても悲しくても、泣きながら。わたしの《ファド》は移ろいやすかった。でもいつもあったのは、わたしがうたうこと。

＊《ファド》ということばは、歌のジャンル名であるほかに、宿命・運命の意味を持っています。

2．アルファーマ *Alfama*

詞：アリ・ドス・サントシュ Ary dos Santos; 曲：アライン・オウルマン Alain Oulman

作詞者は、ポルトガル現代詩の代表的な存在のひとり。裕福な家庭の出ですが、16 才のときに家出し、コピーライター等々の仕事で生計を立てながら、詩を書きつづけました。1984 年に 46 才で亡くなるまで、一生のほとんどを、アルファーマ地区のサウダード通りの家に住んでいました。

作曲者は、フランス人の両親のもとにリスボン郊外で生まれました。ファドのエッセンスを堅く守りながら、詩と悲しみに満ちたメロディを創作し、ファドに新しい次元を与えました。1989 年パリで没、61 才でした。

リスボンは夜をむかえると、まるで帆のない帆船に見える。そのときアルファーマは、窓のない一軒の家。そこでひとびとは冷え込んでゆく。

ひとつの屋根裏部屋、苦悩から盗んできた空間に、アルファーマは閉じこもる、涙の壁に囲まれ、満たされない望みの塀に囲まれて。涙と望みは、夜には歌をつくり、それが街に燃える。魔法が解けたあとの幻滅に閉じこめられて、アルファーマは《サウダード》の匂いがする。

アルファーマはファドの匂いはしない。ひとびとの匂い、孤独の匂いがする。苦悩する静けさの匂いがする。パンといっしょに食べる悲しみの味がする。

アルファーマはファドの匂いはしない。でも、ほかの歌はもっていない。

Foto ©2009 Marie Mine

＊《サウダード》は、過ぎ去ったもの、失ったもの、そこにいないものを想う、愛惜をこめた悲しい感情です。

3．アヴェ・マリーア・ファディーシュタ　*Avé Maria fadista*

詞：ガブリエーウ・ド・オリヴェイラ　Gabriel de Oliveira
曲：フランシーシュコ・ヴィアーナ FranciscoViana

作詞者（1953 年、62 才で没）は、第一次世界大戦で、ポルトガル海軍で功労があったとのこと。その後、お役人をしながら、ファドの歌詞をたくさんつくりました。とくに民衆の信仰心をうたった曲で有名です。このメロディは、非常に古い長調のファドにもとづいています。

神聖なマリアに讃えあれ。気高い美しさへの、この、あまりにも小さな祈りの歌。

すべての女性のうち、もっとも祝福されたお方、あなたはイエスを身ごもられた、愛とかぎりない恩寵のもとに。

痛みの聖母マリア様、ファドをうたい弾くことが罪ならば、わたしたち罪びとのためにお祈りください。

ファドをうたうものはだれも、運に恵まれないものばかりです。わたしたちのためにお祈りください、母なる処女よ。今も、いつも、そしてまた、わたしたちの死の時にも。

4．海の見える街角で　*Na esquina de ver o mar*

詞：ルイーシュ・ド・マセード Luís de Macedo; 曲：アライン・オウルマン Alain Oulman

作詞者は、現代詩人で外交官（パリ勤務）。1960 年代の初め、夏休みをポルトガル大西洋岸の別荘で過ごしていたとき、そこにアマーリアさんを招き、作曲家オウルマンを紹介しました。

リスボンの東グラーサ地区の丘の上、海の見える街角でのことだった。なんてたくさんの悲しみと不幸！　それらは喜びのふりをして通り過ぎていった。街の通りを、歌いながら……。

リスボンの西アジューダ地区の丘の上、川の見える街角でのことだった。悲しい人は自分から逃げてはいけない。その悲しみは変わることはありませんよ。たとえ、望むものが変わっても……。

空の街角でのことだった、川と海が見えていた。ある夜起こったことだった。わたしだけのものだったひとつの夢が、わたしのそばを通り過ぎた。でもわたしは、見失ってしまった……。

● グラーサの丘のはずれにて。

●アジューダの丘のまんなか

fotos: ©2009 Marie Mine

5．ロンダ・ファディーシュタ　*Ronda fadista*

詞 & 曲：ドミンゴシュ・コシュタ　Domingos Gonçalves da Costa

タイトルになっていることばは、ふつうは、ファドの歌い手たちが酒場などに集まって、即興的にかわるがわる歌うパーティのことです。この曲では、ひとりの歌い手が夜の街をめぐっていくことに使われています。

ギターを持っていらっしゃい、ふたりで跳びはねながら行きましょう、バイロ・アウトのあちこちの通りを、わたしたちの友だちファドを歌いながら。

わたしはサンダルをはきましょう。そのほうが粋に見える。そして心からの歌をうたいます、美しい月の光の下で。

そして楽しそうに腕をからめて、朝が生まれる前に、ふたりで並んでいきましょう、モウラリーアのほうへ歌いに。

どんな人よりもしあわせに、モウラリーアを出たら、アルファーマへ行くことにしましょう。そこでもファドを歌うために。

輝く太陽を、晴れわたった空に置きながら、神様は祝福しながら言うでしょう。――なんとファディーシュタの、このカップル！

＊《ファディーシュタ》ということばは、19 世紀には、酒場で暮らしているような「ならず者、やくざ者」の意味でした。男性にも女性にも使えます。1920 年代（?）からは、その意味と平行して、やはり男女にかかわらず「ファドを歌う人」を指すようにもなりました。《ファディーシュタ》が、ファド専門のプロ歌手という意味になったのは、比較的新しい時代のことです。

6．モウラリーアは夜　*É noite na Mouraria*

詞：ジョゼー・マリーア・ロドリーゲス José Maria Rodrigues;
曲：アントーニオ・メシュトル António Mestre

作曲者はポルトガル南部の出身で、幼いときに一家でフランスに移民、パリでアコーディオンや音楽理論を学びました。1940 年代からポルトガルに帰って、ファドやフォルクローレの演奏活動をしました。1960 年代にリオのコパカバーナ海岸にポルトガル・レストランを開き、いまもブラジルに住んでいるようです。

モウラリーア地区は、売春街があった 18 世紀半ばに、ファドの発祥地のひとつでした。今日では、補修できない古い家並みに、なにやら廃墟の雰囲気がただよっています。

ギターがひとつ小さな声で、薄暗い路地で、昔のファドを口ずさんでいる。モウラリーアは夜。

タイジョ河から聞こえる船の汽笛ひとつ。道をやくざものがひとり通ってゆく。どの口にもひとつのキス。モウラリーアは夜。

すべてはファド。すべては人生。すべては寄るべのない愛、痛み、感じやすい心、喜び。

すべてはファド。すべては運命。命と死の布の裁ちくず。モウラリーアは夜。

7．サント・アントーニオの夜　*Noite de Santo António*

詞：ノルベールト・ド・アラウージョ Norberto de Araújo; 曲：ラウーウ・フェラォン Raúl Ferrão

リスボン生まれの聖人サント・アントーニオ（13 世紀）は実際には力強い性格の説教師でしたが、ポルトガルやスペインでは、イエス様を抱いた優しいイメージで慕われています。リスボンでは、恋人たちの守護者としても人気（?）があり、その祭日の前夜祭（６月 12 日の夜）はお祭りだらけの６月の中でもいちばん盛大な祝典・街頭パーティが繰り広げられます。

鉢植えのマンジェリーコ（バジリコ）にカーネーションの造花を挿し、愛の詩を書いたカードを付けたものが、聖アントーニオへの捧げものです。また、アーティチョークの新芽を道に埋めておき、それが翌日になって花火や爆竹で焦げてもまだ生きていたら、愛が成就するのだそうです。

作詞者（1952 年没、63 才）は大新聞の記者でしたが、1935 年に、サント･アントーニオの夜に、各地区が《マルシャ》のリズムで大通りをパレードするイベントを企画・実現しました。これは今日までつづいています（マルシャは音楽だけでなく、パレード・グループのことも指します）。

この曲は 1950 年のもので、作曲者（1953 年没、63 才）は最初にほとんど全地区のテーマ曲を作曲した人です。ファドはもちろん、歌謡曲、レビュー音楽、と無数といえるほどの曲をつくり、ポルトガル・ポピュラー音楽史上最大の存在でしょう。

ここをマルシャが進む、離れられないわたしの道連れ。どうのこうの言わないで。恋愛のことは、なるようにしかならない。

マンジェリーコを飾った祭壇のある、フィガイラ広場のダンス会場は廃止になったけれど、みんなここへやってくる。好むと好まざるとかかわらず。

リスボンはいつも恋多き女、恋人たちの行列ができる。どうのこうの言わないで。愛することは運命、歌うことは妖精からのさずかりもの。

歌がひとつ、水彩画ひとつ、窓からのぞく開いたカーネーションひとつ。わたしの古い地区がある美しいリスボン。腕を出して、わたしとダンスに行きましょう。

おぉサント･アントーニオの夜、おぉ魔法のリスボン。アーティチョークに花が咲き、花火が爆発する。街々が歌っているかぎり、街頭に屋台が並んでいるかぎり、サント･アントーニオがあるかぎり、リスボンはもう死なない。

アレグリーア広場にて

こういう昔ながらの、庶民的なさりげない雰囲気を保っている落ち着いた広場は、今はリスボンでも少なくなったそうです。この広場は 300 年前からあるとのこと。そのころの空気も残っている？？？

最初のマルシャのパレードは、リベルダード大通りからこの広場へ上がってきて、さらに坂を上ってマイエル広場まで行ったのだそうです。ここは大通りのすぐ西にあるグローリア地区です。観光名所はありません。

●リスボンの「アマーリア・ロドリーゲスの家」博物館のパンフレットの表紙。アマーリアさんが 10 代で初めてプロとして歌ったときの自作の歌詞が載っている。
「わたしは、アマーリア・レボルダォン（これが父の姓）、新しい歌う女です。心の根から生えた、この歌を愛するがゆえに、わたしはほんもののファディーシュタ」

2ª parte

1．このおかしな人生　*Estranha forma de vida*

詞：アマーリア・ロドリーゲス Amália Rodrigues;
曲：アルフレード・マルスナイロ Alfredo Marceneiro

アマーリア・ロドリーゲスさん（1920－99）が若いころつくった歌詞です。つくったときは、それほど大事にしていなかったようですが、妹のセレーステさんがたいへん気に入って、ステージでしばしば歌いはじめました。それを聴いて本人も良さを再認識して（！）、ときには自分も歌う……どころか、後年はコンサートのテーマ曲みたいにしていました。

ファドでは、まず歌詞があって、それからメロディを探します。この歌詞には、ファドを歌う男性の最高峰マルスネイロがつくった《ファド・バイラード》と名づけるメロディを使いました。ただしアマーリアさんの創造で、まるで別の曲に聞こえるくらい変えて、表現を大きくしています。

神様の意思だった、わたしがこの心乱れる熱望のなかに生きているのは。すべての「アィ！」は、わたしのもの、それがわたしのサウダードのすべて。それが神様の意思だった。

なんと不思議な生きかたを、このわたしの心はもっているのか。道に迷った人生を生きている。だれか魔法の力をわたしにさずけてくれないものか。なんとおかしな生き方！

ひとり立ちした心、わたしがあやつっているのではない心。おまえは人々のなかに迷い込んで生きている、勇敢に血を流しながら。ひとり立ちした心。

わたしはおまえといっしょに行かない。止まれ、鼓動するのをやめなさい。どこへ行くのか知らないのに、かたくなに走りつづける心。わたしはおまえといっしょに行かない。

2．わたしは海へイワシを探しに行きました　*Fui ao mar buscar sardinhas*

詞：アマーリア・ロドリーゲス Amália Rodrigues; 曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ Carlos Gonçalves

アマーリアさんは重い病気などで長く活動できなかった時期がありました。60 才のときにすべて自作の歌詞によるアルバム『わたしは、そんなわたしでいることが好きだった（日本版タイトル：私の中のファド）』を録音してカムバック。これはその中の１曲で、ユーモアと遊び心と悲しみがゴチャマゼになった傑作です。こんな奇怪なイメージにあふれた物語は、どんな現代詩人にも書けませんね。

わたしは海へ、イワシを探しに行きました、わたしの恋人に上げるため。でも汽船からのぞき見している丸い小窓たちのあいだで道に迷ってしまいました。

汽船からのぞき見してるとあるフランス男の顔が見えました。もうどうなってもいい。わたしはまた海に出かけます。

わたしはまた海へ行きました。汽船は出港していきました。もうフランス男は見えず、わたしはずぶぬれで帰ってきました。

わたしから希望がすべて跳び出した。海からイワシが跳び出した。天秤（てんびん）ばかりからノミが跳び出す。それはいいのよ、わたしのじゃないから。

わたしは海へイワシを探しに行く。もうフランス男のことは忘れた。わたしが思ったことじゃない。あなたの知ったことでもない。

海に出かけてきたあとで、わたしの思ったことは、わたしには砂が入っちゃったらしいということ。それも入ってはいけないところへ。

……これは謎々ではありません。わたしは謎をかけるのはきらい。要するにわたしは海へ出かけたということ。イワシを探しに行った。それは判ったでしょう？

海を行くイワシは気持ちいいにちがいない。水はあるし、泳ぎは上手。わたしもイワシになりたいな。

3．おぉ松の木、わたしのきょうだい　*Ó pinheiro meu irmão*

詞：アマーリア・ロドリーゲス Amália Rodrigues; 曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ Carlos Gonçalves

これも同じアルバムに入っていた曲です。作曲者は、約30 年間にわたってアマーリアさんを伴奏してきたギターラ（ポルトガル・ギター）奏者。後半は彼女に信頼されて音楽監督の役割もしていました。

小川よ、もう走ってはいけない。おまえは永遠のものにはなれないのだから。夏がおまえから盗んでしまうよ、おまえが冬からもらったものを。
山に生えている木にも、それなりの差別がある。ある木からは聖人の像が作られ、ほかの木は炭になる。
わたしは不運に落ち込んでいる、どうしたらいいのだろう。わたしが絵に描く聖人はみんな悪魔になってしまうにちがいない。
わたしの悩みはとても大きく、わたしを引きずり、溺れさせるほど。あとからあとから悩みがやってくる、まるで波が海を渡ってくるように。地の下にある木の根、草の根、わたしは抜いて食べる。でも枝だけは食べない。風が持っていくから。
おぉ松の木、わたしのきょうだい。おまえもわたしと同じ。おまえも、むなしく広げている。空に向かって、両腕を。

4．人がだれかを好きになったとき　*Quando se gosta de alguém*

詞 & 曲：アマーリア・ロドリーゲス Amália Rodrigues

これも同じアルバムで、唯一アマーリアさんの作曲したものです。19 世紀から伝わる長調のファドのスタイルを、少しだけ変えたメロディ・ラインです。本人は「なんとなく口ずさんでいるうちにできました。名作だなんて思っていませんが、これがわたし流のメロディです」と言っています。彼女の歌いかたには、いちばん自然なメロディなのでしょう。非常にファド的でもあります。

人がだれかを好きになると、なにかを感じる……とはいうものの、わたしにはまだわかっていません。何を感じるのだか、正確には。
だれかがだれかを好きになると、自分のことが嫌いになる。その人ゆえに夜も眠れず、愛に迷ってさまよい歩く。
だれかがだれかを好きになると、このわたしのように、さまよい歩く。わたしの歩きぶりは、ぜんぜん良くない。こんな不幸に当たったのだもの。
人がだれかを好きになると、病気になったのと同じこと。愛が大きければ大きいほど、ひどい苦しみを感じる。
わたしの好きな人を、わたしが好きなように、だれかがだれかを好きになると、その人の持っているいやなところが、そのいやなことが大好きになる。

5．わたしは川で洗っていました〔洗濯〕　*Lavava no rio, lavava*

詞：アマーリア・ロドリーゲス Amália Rodrigues; 曲：フォントシュ・ロシャ José Fontes Rocha

アマーリアさんの両親は貧しく、首都リスボンへかせぎに出てきて彼女を生んだのですが、その後またポルトガル北東部山間の故郷に帰ってしまいました。
この曲の作曲者も長くアマーリアさんの伴奏をしていたギターラ奏者で、ゴンサウヴシュ同様に、はじめは第２ギターラ、やがて第１ギターラになりました。そのときの第２がゴンサウヴシュです。

川で洗たく、洗っていた。凍る寒さにわたしは凍っていた。川へ洗いに行くときは，ひもじい思い。おなかをすかせていた。ときには涙、わたしは泣いた。お母さんの泣くのを見て。
ときには歌も、わたしはうたった。ときには夢も、わたしは夢見た。わたしの空想の中で、いろんなことを空想した。そして泣いていることも忘れた、くるしんでいることも忘れた。
もうわたしは川へ洗たくに行かない。でも泣くことはつづいている。もうむかし夢見たことは夢に見ない、もう川で洗たくをしないのだもの。それなのにどうして、この寒さがわたしを凍らせるのか、あのころわたしが凍っていたよりも冷たく。
あぁお母さん、わたしのお母さん、どうして懐かしいのでしょう、あのころ不幸を知っていたということの幸せが、あのころわたしを苦しめたひもじさが、わたしを凍らせた寒さが、そしてわたしの空想が。
もうわたしたちは、おなかをすかせていない。でも、もうわたしたちは持っていない、何も持っていないがゆえの望みを。もうわたしたちは夢を見ることを知らない。もう、だましながら進んでゆく、死にたい望みをだましながら。

６．ラグリマ（涙）　*Lágrima*

詞：アマーリア・ロドリーゲス Amália Rodrigues; 曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ Carlos Gonçalves

全曲アマーリアさんが書いた歌詞による２枚めのアルバム（1983 年）のタイトル曲でした。たいへんつらい気持ちの中で書かれた詩なのでしょうが（多くの場合、１日に２行、また数日して２～３行と、断続的に書かれていったようです）、これを歌って聴いてもらおうという思いが、彼女が健康を回復するエネルギーになったようです。

悩みでいっぱいになって、わたしは横たわる。そして、もっとふえた悩みとともに起き上がる。わたしの胸に、もう居ついてしまったこんなやりかた、あなたがこれほど好きだというこんなやりかた。

絶望――わたしの絶望ゆえに、わたしの中で、わたしは刑罰を受けている。あなたがきらい――わたしは、あなたがきらいと言っている。そして夜は、あなたのことを夢を見る。

いつの日かわたしは、死んでゆくのだということを思うとき、あなたに会えないゆえの絶望のうちに、わたしは地面にショールを広げる。そしてそのまま、まどろんでいこう。

もしもわたしにわかったら――死ぬことによってあなたが、わたしのことを泣いてくれるとわかったら、ひとしずくの涙――あなたのひとしずくの涙ゆえに、どんなにうれしく、わたしは命を捨てるだろう。

お聴きいただき、ありがとうございました。
またお会いできるのを楽しみにしております。

選曲・構成：峰 万里恵／プログラム制作：高場 将美
http://mariemine.web.fc2.com

お知らせ：

９月５日（土）の同じ時間、このお店で、
ファドのライヴをいたします。
ファドには、まだまだたくさん、それぞれの魅力あふれる
すてきな曲があります。ぜひ、楽しみにいらしてください。

ご予約は：Fax: 03-3235-0470　Email: marie-mine@hotmail.co.jp （峰）
Tel & Fax: 03-3364-3366 （オレ）